

## 鎮めものとしての「葫蘆」研究

陶 思炎<sup>※</sup>

「葫蘆」(瓢箪)は、また蒲蘆、壺蘆、瓠瓠、瓠瓠、瓠瓜、瓠瓜とも言われ、ずっと以前から夏の花、秋の実の果物として人類に注目されるだけではなく、豊富な文化情報を包容し、しかも一つのはるか古代におけるコンプレックスの象徴として、一つの天地と関わり合い観念の実演として、人の助け、妖怪の捕え、毒のとり、生命の誘い、体の守りなどの働きを伝導している。葫蘆は幻想的神話の素材でもあり、現実的民俗の物品でもある。民間の生活の中では、それは多くに厄除けの呪物の特徴として、その応用の文化的意義を展開されるようになっていく。

### 一、葫蘆——魔よけの鎮めもの

鎮めものは、また「魔除けをするもの」、「邪気を避けるもの」、「まじないもの」、とも呼ばれ、伝承的な器物文化の一つとして、有形の実体で無形の観念を表し、人々を助けて、実際の災いや危険、あるいは幻想的神霊と鬼怪によりもたらされた各種の心理圧力に直面し、象徴の方法を通じて護衛したり、拒んだりする。鎮めものは心の知恵と情感を凝集する器物であり、一つの想像的文化の道具であり、それは主に風俗的伝統に依存し、神話の観念と巫術の観念の応用を具現する。

葫蘆の鎮めものは原始文化の段階の端を発し、生殖崇拜と植物崇拜から派生する文化器物である。それはあるいは直接に自然界から取り、あるいは人工的に模擬し作られる。原始の葫蘆洪水神話は絶滅をしないように種を

保存、災難を取り除き、死亡を避け、生命を追求するということを主題とする。葫蘆を神話の要素となり、それは安全的な島、繁殖する温床、万世の救星などの意味を指す。その神話的論理はもう葫蘆が厄除け用とされた意義をあらわにしている。

新石器時代における彩陶の葫蘆瓶は人工的製品として、鮮やかに鎮め物の特徴がある。その器の形が全体的に葫蘆と似たり、あるいは男の生殖器と似たりする以外、その瓶面の素材はレジューメをつくって、絶妙な効用も持っている。例えば、仰韶文化遺跡で出土された葫蘆瓶(図1)の上には、口の外にはみだした長い歯をしている獣の頭を描かれ、そのかかれた容貌の凶悪である獣によって、化け物と悪鬼などを威嚇し、かつ男の生殖器の形で陽の取り、陰の引きの意味を表す。この類の葫蘆瓶は生者にふだん使わせるものであうと、死者に魂を落ち着けさせるものであろうと、全て鎮めと護衛の機能を明らかにする。このような瓶画は今の雲南地区にある剣のつばにおいて、依然ながら跡を残しているが、剣のつばが葫蘆から多く取材し、古今の

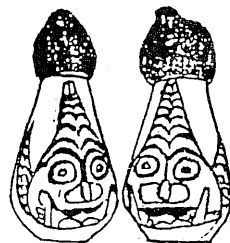


図1 仰韶文化葫蘆瓶

※東北大学文学部外国人研究者

中国東南大学東方文化研究所長

葫蘆鎮めものの伝わり関係を表現する。半坡類型にある仰韶文化の葫蘆瓶には、また魚が鳥の頭を呑み込む画が多く見られる(図2)。魚が蔭の虫で、鳥が陽の物だから<sup>①</sup>、魚の口が女陰の象徴で、鳥の頭が男の生殖器の指示である。実は、魚が鳥の頭を呑み込むことは性器交合の状態、生殖の過程を実演してみせる<sup>②</sup>。この瓶画は「生」を基調して、絶滅などの災いへの鎮め魔除けるのを追求しようとする。



図2 魚呑鳥頭葫蘆瓶

葫蘆は魂を定める巫具として、古代に広く用いられており、牙の筒、竹の筒、椰子の殻、皮の袋と同じ、靈魂を納め込むのは護衛するためか、さらに夭折の邪悪を払い除き、死亡を避けるようになっている。中国の道教における神話、葫蘆が靈薬と相関し、さらに道神あるいは仙人の最も特徴的の携帯物である。例えば、「八仙」の中にいる鉄拐李(図3)鯉に乗り海を渡る琴高、寿星の膝元にある小間使、人の眼疾を治す眼光聖母(図4)、ハスを取り箱を捧げる和合二仙及びぼろ着でほうき持ち「気のふれた和尚」、薬の葫蘆あるいは避け葫蘆は常に身につけられる随伴品である。仙人が長生不老の人であり、葫蘆の中の仙薬が寿

命を延ばせる不死の薬であるから、葫蘆は死亡の払いをし、悪鬼などを鎮める意義を表している。

近代の端午の節句には、彩葫蘆と紙葫蘆も鬼を避け疫病神を鎮める歳時ごとの鎮めものである。

彩葫蘆は普通ねり絹で作られ、色付きの糸で通したり、あるいは色付きの紙で折り目をつけたり、切ったり貼ったりしてから作られるもので、それを帯びる飾りと入り口の戸に貼るはり紙にする。民国二十三年(1934年)活字印刷された十二巻本『万全県志』ではこう記述されている。

五月初五この日、「端午の節句」と謂れ、「端五」と俗称され。……女性がねり絹で子虎、桑の実、葫蘆などを作り、色付きの糸でさしつらねって、かんざしの先に結びつけるし、あるいは子供の方に縫われている。

これから見れば、彩葫蘆は女性、児童が身につけられる護身用鎮めものだと分かる。その鎮める機能に至っては、民国二十年活字印刷された巻書『天津志略』にこう書いている：

五月初五、女が皆ねり絹で子虎、クワの実、葫蘆などを巧みに作り、色付きの糸で貫き、かんざしの上に挿し、あるいは児童の背面に結んでおり、鬼を避けるよう、しかも病にかからないように認められる。

明らかに、鬼を避け、病を除くのは彩葫蘆が端午時の鎮めものとなる動因である。紙葫蘆と言うと、一般的に赤紙で切り作られたものであり、窓や門に貼り、ただ虫を除かせ、毒を漏らさせるところに使われている。紙葫蘆は葫蘆の基本的な形以外、その上で、ハスの花、隻魚、寿桃、ボタン、ヘビなどの模様が彫られており、凶事を払い、吉兆を得る意味を表す(図5)。この類の紙葫蘆はある際サソリ、ヤモリ、ムカデ、カ、ガマ、クモなどという毒虫の模様を加えて、そして葫蘆の口



図3 葫蘆を背負う鉄拐李



图4 眼光聖母

が逆さに向け、「五毒」への鎮め殺すことをさす。

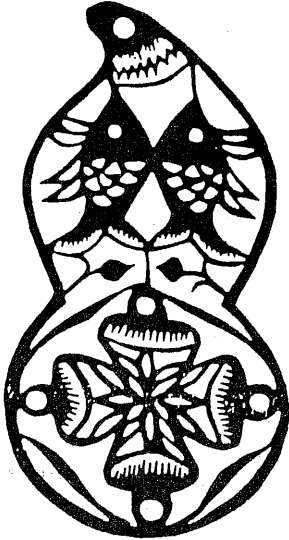


図5 紙葫蘆

外には、葫蘆の首飾り、葫蘆の木彫、ベットの上における葫蘆の模様、塔やあずまやのてっぺんにある葫蘆のような屋根棟飾り、祭祀儀礼中、葫蘆のような香炉と祭器、占い際、方向を決める木杓、また婚礼中、葫蘆の杯が酒杯を交わす器、木杓共に際画に加えるのが住宅を鎮めるつばとなること、全て葫蘆の鎮めたものの種類の応用と認められている。それらは身を守り、住宅を鎮め、生を祈り、死亡を払い、災いを除き、吉兆を得るなどの意味を表す。要するに、隠しとも現しとも葫蘆鎮めものの多重的機能を展開している。

## 二、歯鎮めものにおける葫蘆の因子

歯は身の守りと生命の誘いの鎮めものとして、原始文化の中にも見られている。原始人が獣の歯を帯びることは、耽美的衝動ではなく、身を守り、生命を誘いへの追求するからである。原始の彩陶模様にて於いて、びっしり詰まり並んだ歯を図案にすることがよく見ら

れており、生命への祈願がほのめかしている。晋・張華『博物志』巻三の中にこのような神話が記述されている：

南海にワニがあり、かたち大ガメと似、頭を切り干させ、歯を捨てれば、また生え。このように三回で止め。

以上は歯の再生をもとにして歯の中にも含まれる生命を強調し、歯が起死回生の主題をも強調している。

歯が生命との繋がりは、中国の古代文化に文化の誇張を加え、宋・樂史『太平寰宇記』の中では江蘇の高郵の「並び歯の石」を述べる際、こう言われている：

並び歯の石は、高郵の神居山にあり、石の歯が並び歯のごとく。数えれば、始から終まで、その数が必ず増えてゆき、終から始まで数えれば、その数が一層増えてゆく。意外にもその数の分かる人もいない。

この風物伝説は歯が生命の象徴としての神話信仰の上に築き、「その数が必ず多し」を通じて、歯の繁殖力を誇る。

敦煌の夢書の中には「歯の生える夢を見る人がいれば大きな吉、歯の落ちる夢を見る人がいれば大きな凶」<sup>③</sup>と載っている。歯の生えと落ちるのを生命の存亡と同日に論じる文化観念は歯が厄除けの呪い物となる信仰基礎であり、歯が魔除けをする風俗の中に引かれた動因でもある。

歯をほり、歯のやすりをかけ、歯を染め、歯を嵌め込みなどは太平洋の周りにおける文化現象である。その機能、潜ませる意味から言えば、生命を誘発する鎮めものの性質を持っている。新石器時代の大汶口人及び屈家人の中に、歯のほりという風俗が流行されていた。日本では、縄文時代と弥生時代、歯を抜く習俗もある嶺南越人は五千年前、抜歯をはやっていた。『山海経・海外南経』の中に「後羿が歯ほりの人と寿華の郊外に戦った」と書いており、上古の「歯ほり」の部落が中原に存在

することを記録されている。中古以後、西南の少数民族はまた歯をほる習慣も続いており、台湾東部山地にあるタイヤル族、ツォウ族、ブヌン族、サイシャット族は今世紀に至っても歯を抜く遺風が見られている。

抜歯の風俗は成人儀礼、婚姻儀礼、葬送儀礼とは切っても切れない関係がある。抜かれた歯が体の厄除けの呪物として貴重な宝と認められている。『太平寰宇記』の中では雅州の風俗についてこう言われている：

四川<sup>コラオ</sup>佬人、成年になればその上の歯を抜かせ、犬の牙を加えて、装飾品とする。

海南<sup>リ</sup>黎族<sup>コ</sup>の俸人が犬の歯を護身の首飾りにして、羌<sup>チヤン</sup> (Qiang) 族の祈禱師が獣の口からむき出した牙で猿皮の帽子を飾っており、インドネシアのシカリマントンにあるケラー族の部落において、猪の牙を以て赤ん坊を背負いかごの装飾となっていることがある。上述の事例を見ると、歯飾りの潜ませる効用は厄除けの払い、鎮めることが分かる。人の歯は獣の牙と同様、全て身のお守りである。雅州にある佬<sup>コラオ</sup>の抜歯は成人儀礼に属するわけで、歯に神秘的法力を与える。実は、生命への褒めであり、成人意義の誇りである。

婚姻習俗の中では、抜歯もかつて普遍的な現象である。『太平寰宇記』の中にこう書かれている。貴州に「土着民がり、皆烏訶<sup>ウハ</sup>（古代の南方諸民族）である。……娘がお嫁になる前、前の歯を抜かせる。」『溪蠻丛笑』の中では、「佬<sup>コラオ</sup> (Gelo) 族の女が十五、六歳になると、右上のひと歯を抜く。」と述べている。李京の『雲南志略』の中において、こう記載している：「男の子が十四、五歳、左右の歯を一つずつ抜いて、妻を娶る。」田雯の『黔書』の中にも「女の子が新人になろうと、二つの歯をぬかねば夫の家族を損ねる恐れがあり。」と記述している。またフィリピンの Island of Mindanao の女性とラオスのルカイ族人は結婚前、歯のやすりをかける習俗があり、ベトナム、

ラオス、タイ及び日本の長崎などにある女性は昔歯を黒く染めた後、嫁入りにする事象がある。以上の歯に関する特殊的処理は、主に歯が鎮めと厄除け用の機能を強調している。

葬送習俗の中では、歯の応用もみられる。明朝の田汝成『炎織紀聞』には、佬<sup>コラオ</sup>人の中で、「父母がなくなった際、遺族が、二つの歯を抜き棺の中に投げて、贈り物として永別しよう。」と記述されている。そして、『広西通志』の中において、以下のように残されている：

佬<sup>コラオ</sup>が黔中より来、棺があるが、埋葬なし。山の洞穴に置いて、高さは地上を千尺離す。父母が死、家族の人が別々二つの歯を抜き、棺の中に投げて、永遠の別れとする。彼らを「抜歯の佬」と呼ばれる。

太平洋の他の地区にはかつて歯を折らせ、死者に贈る風俗がよく見られる。歯は棺を護衛、再生を誘いの鎮めものとして、その文化の寓意はかなり深遠と言えよう。

歯が通過儀礼と葬送儀礼の中に特殊的に応用されたのは、歯は生命観、葫蘆観と強く結びついているからである。『釈名・釈形体』の中にこう言われ：「歯、始まりである。』『爾雅・釈詁』の中にも「歯、寿なり」と書いている。歯は生命の始まりと寿命の象徴と称されている。その上、この文化理解により、子供がよく「仔子<sup>ヤ</sup>」「牙兒<sup>ヤ</sup>」あるいは「芽芽<sup>ヤ</sup>」と呼ばれている<sup>④</sup>。

子供が「芽芽」と呼ばれ、歯が生命の始まりと視されるのは、葫蘆文化の因子を融合するからである。『詩経・衛風・碩人』の中に「歯が瓠犀<sup>コ</sup>（ユウガオの種）のごとし」という言葉は、それを追跡したり、解説したりする手がかりとなるだろう。“瓠犀”は瓜の種を指す。したがって、“瓠犀”は葫蘆の種とでもいうべきものである。

歯を葫蘆の為のたとえは一般的比喩ではなく、一つの文化の類比と連想に属している。歯は無から有に発生しはじめる特性、乳歯が落ちて知歯が生える“再生”のルールなどを

持っており、さらには八、九十歳すぎの老人すらもまた第三回の第白歯が生える不思議な現象がある。これらによって歯が生命の種の特徴に対する連想を誘っている。ある民族神話の中では、女陰の中に歯が生える伝説があり、同時に葫蘆から人が生まれ、葫蘆の中に人を隠し、洪水から生き残るという生育と繁殖の神話ほどがある。葫蘆がもともと女陰の象徴であるので、女陰における化「歯」は葫蘆の中における種と同じように、生命の種という意味がある。こうして、歯鎮めものというのは、実は葫蘆鎮めものから派生するものと言えよう、あるいは葫蘆鎮めもの因子を帯びる文化亜種とでも言えよう。

### 三、葫蘆鎮めものの文化詮釈

中国の「四大伝説」に於いては、『孟姜女』は最も人心を驚かす作品であり、それは「長城」の素因で濃い歴史的內包を帯びさせる以外、神話的色彩が少なくないと見られる。例えば、江南に伝わった『孟姜女出生』の中では、孟姜女が大きな瓜の中に生まれ、「瓜からの赤ん坊」といわれている。実に言えば、これは「葫蘆の赤ん坊」からの誤りであろうか、孟姜女の生まれた「大きな瓜」は、「大瓠」であり、即ち「葫蘆」というべきものである。毛詩の中には、「縣縣瓜瓞，瓜瓞嗶嗶，民之初生」（小さなウリあ大きなウりに連なり、大きなウリが小さなウリにとぎれず長く続き、人類の初生なり。）と書かれている。また民間のめでたい図案における「瓜瓞」、「万代長春」など、すべて小さなり大きなり綴り合わせる葫蘆で表現としている。（図6）。古代人は葫蘆をウリ類に視し、その多くの別称がよくウリを偏旁にしている。『広韻』の中に葫蘆についてこう説明している：

瓠，瓠なり。が，匏，瓢，瓠，瓠，皆同じ物であり，瓠瓢，あるいは壺蘆，あるいは瓠瓢とされ<sup>⑤</sup>。

清人郝懿行『爾雅義疏』の中では「瓠，瓠



図6 瓜瓞綿綿（吉祥図案）

瓠と謂れ。」と指摘されている。民間の中では、平素から葫蘆に対して「瓠瓜」、「匏瓜」という呼びがあるために、孟姜女の生まれる「瓜」は「葫蘆」を指す。文化に潜ませる意味から言えば、葫蘆は胎児を守り、出産を助けとしての呪物と認められている。

葫蘆は生育の標識として、女陰あるいは子宮の象徴的構成要素がある以外、また男女、陰陽、天地通連の符号ともなっている。実は、原始の彩陶葫蘆瓶からこの文化情報を明らかにされている：壺の頭が九、小さくて、男の生殖器を差し、壺の体の中身が空で女の生殖器を指す。したがって、全体的に器具の形を見れば、男女併合、生命を誘い、妊娠をさせ、死亡を払い、絶滅を除きなどへの祈願と厄払いの機能を期待している。古代の祭器の中における「陶瓠」、また「陶匏」も、形が葫蘆のような作り方である。卢澂『祭法』の中に「夏祭秋祭，皆ウリを用いる」<sup>⑥</sup>を言及していた。この「ウリ」は「葫蘆」をも示し、つまり、

葫蘆が祭器、祭品としてよく使われている。形が葫蘆のような祭器に対して、『通考』の中では、こう解釈している：

一周の始まり、祭器が陶瓠を用いて、天地の特徴の如く、始の所に戻れ。

『郊特性・説郊』の中には、こういう記述を残している：

器として陶瓠を使い、天地の特性の如く<sup>⑦</sup>。

「陶瓠」,「陶匏」はなぜ、「天地の特性の如く」か、あきらかには、その頭尖腹円、外実内空、連体成雙という特徴から、男女性交、陰陽化合、天地抱擁への連想を誘っているからだろう。「天地綯纏」（天地の匂い）,「男女構精」により、陶瓠は祖先を祭祀する器として魂を定め転生を誘う巫具の効用が含まれており、そして、人々の再生への祈願などの儀礼的鎮めものとなっている。

葫蘆における「天地の性」はまた婚礼と塔のてっぺんに使われた信仰基礎となり、婚礼の「合盃」は、即ち新郎新婦が対になして新婚の部屋で「交杯酒」（酒杯を交わす）をする儀礼である。使われた杯は葫蘆を二つに分けられた木杓で、分ければ半になって、合わせれば一つにまとまる。それは天地相合、男女相愛という意味を表し、さらには赤ちゃんの出産への祈願の吉兆となっている。塔の頂上、あずまやの先、屋根の棟などから、葫蘆のような部材と装飾品が見られて、天地の模倣をしようとする。その建築物は神話観念における宇宙類型を演じさせてお、屋根を天の柱にして、天地一体の人工的空間となっている。そして、天地抱擁の宇宙図形の縮図ともなっている。葫蘆のような器物あるいは飾り物が屋根の棟などに使われるのはその宇宙観念を明かしようとするわけであり、長く宇宙との存在への追求体现している。この追求において、あくまでも理にかなって災いを免れ、一時を捨てて永久を得るという鎮める心理が際立っている。

葫蘆文化はまたある地名に跡形を残されており、雲南永寧摩梭村の付近にある「ロコ湖」は、形が葫蘆と似て名付けられた。その土着民は「ヘンラミ」とも呼ばれている。その意味は「母の海」なのである。これからみれば、ロコ湖が「葫蘆」によって名付けられたのは女神崇拝と関係があることが分かる。道人が極楽境に対して、「壺天」という言い方があり、海にある神山に対して「方壺」という名があり、明清朝、故郷に帰って客を断ろうとする私家庭園の中でも「小方壺」という名が見られる。「壺天」などの名は葫蘆別称でもあり、それは再生の空間、不死の空間を表している。つまり、歓楽が長くやむことなし、長生不老の仙境と指摘している。仙人は古代に「遷人」、生存空間を移す人である。葫蘆の空間相関から引かれた天地通連、陰陽相関の神話及び巫術への連想は、「壺天」という仙境を虚構する基礎であり、死亡への払い、生命への祈願はその主な機能と目標である。

葫蘆は生殖崇拝との切っても切れない関係で、文化因子として多面的に浸透され、応用されるようになる。今では代々伝わる民間の歌謡において、また「葫蘆」を比喩とすることもあり、伝統的寓意に乏しくないと言えよう。蘇北宝応県の農村に、「小小葫蘆刻刻（細い）腰」という婚礼歌謡があり、新婦が実家を出ようと、こう歌われている：

小さな葫蘆、細細（ほそほそ）腰

あたしはママの甘ったれ子

あたしはパパの可愛い子

あたしは兄ちゃんの妹

あたしはママに聞いちゃい

嫁入りのお供え、何

真っ赤な裏をつけた上着やら

真っ赤な靴

「小さな葫蘆」は新婦がみずからの比喩、あるいは男女婚姻の象徴を問わず、婚姻は生殖との必然的な関係を強調しており、不妊を除き、妊娠を祈り、また出産への祈願などを



含めている。

葫蘆鎮めものは生命を楽しむものであり、俗世間に入るものでもある。わずかに仙人の感じを帯びても、民間の俗物として長く永続させるようになっていく。それは自然的な人格化であり、心理的な物象化でもある。それは象徴を特色にして、厄除けの払いを主旨にして、人生をとりどころにして、終始に民間における多彩な生活に奉仕しており、その上、人々が一生懸命にめでたい円満的生活への追求にも奉仕しようとする。

### 注

①『経籍纂詁』巻六の中に『詩靈台序』を引用して：「魚，陰虫であり。」巻四十七の中

に『楚辞・自悲』を引用して：「鳥獸が驚かし、群れを離れる。」「鳥，陽なり。」と解釈する。

②詳見陶思炎：『中国魚文化』，中国華僑出版公司1990年版，第84-90ページ。

③劉文英：『中国古代的夢書』，中華書局1990年版，第41ページ。

④宋孟元老『東京夢華録・育子』：「赤ちゃんに入浴させた後、胎髪を剃り、全てのお客にお礼を言って、‘牙児’を他人の部屋に抱き、‘小芽芽’と謂われる。」

⑤清王念孫『広雅疎証』券十。

⑥唐徐堅『初学記』巻二十八「瓜第十二」。

⑦同⑤。

(李璽，筑波大学大学院地域研究科研究生)

### 新刊紹介

田畑久夫著

### 『民族学者 鳥居龍蔵—アジア調査の軌跡—』

本誌12号の「鳥居龍蔵の満蒙調査」も含まれる鳥居龍蔵論が一書としてまとめられた。鳥居龍蔵に関する特別展が東京大学総合研究資料館(1991)、国立民族学博物館(1993)で開かれ写真集や図録が刊行され、中藪英助による伝記が出版されるなど(1995 岩波書店)、鳥居龍蔵の再評価が高まる中での刊行である。学際化など掛け声は高くても学問が細分化し、全体像が見えなくなっていること、言い換えれば人を対象としているのに人間臭さのなくなった現況が、鳥居の学問研究が求められているとし、そのフィールドワークの特質について、自身の調査経験も重ねながら論じている。構成はプロローグ、第一章 調査・研究への道とその時代、第二章 台湾での人類学的調査、第三章 西南中国における人類学的調査、第四章 貴州でのミャオ族

調査、第五章 雲南・四川でのロロ(イ)族調査、第六章 ライフワークとしての満州・蒙古、第七章 北方文化を求めたシベリア・樺太(サハリン)、付論 中国雲貴高原中部のイ族—生業形態を中心に—、エピローグとなっており、巻末には詳細な引用文献、日本を除く年代別の東アジア関係著作・論文リストが付され、鳥居龍蔵の小さなエンサイクロペディアとなっている。日本文化との関係が深い、朝鮮半島、千島列島の鳥居のフィールドサーヴェイについては本書では取り上げず、別稿を用意しているという。鳥居を先達としての著者の西南中国の少数民族の民俗誌の集大成も心持ちにされるのである。(佐野賢治)

B6判 263頁 古今書院  
1997年5月刊 2900円